

抽象的労働に抗するということ

——ニートの実践を事例に——

Resistance to abstract labor: A case of the practice of young people Not in Education, Employment or Training (NEETs)

立花 弘基

〈abstract〉

That human beings cannot survive without working is perceived as inevitable. Humanity has reproduced life by working in every social formation in human history, but we are alienated from labor in societies in which the capitalist mode of production prevails. The purpose of this paper is to evaluate the practice of young people Not in Education, Employment or Training (NEETs) who reject such alienated labor.

Unemployed people, such as NEETs, are abnormal from the perspective of the modern work ethic. They are excluded from society under neoliberalism because they are regarded as amoral. Accordingly, it has been generally argued that their value should be increased in the labor market through vocational training in order to include them in society. However, social inclusion through discipline can lead to the social exclusion of NEETs who do not want to work.

NEET Co., Ltd. founded by the NEETs who resist discipline and abstract labor is practicing an alternative approach to working. All of the more than 100 members are the directors, and there are no employees in this company. The directors own the shares of the company equally. Their businesses are

essentially “playing.” They work while playing for themselves without receiving instructions from capital. This approach is how to metamorphose labor, which, according to Arendt, is a “necessity” to live, into “free” action.

目次

- I はじめに
- II 労働倫理と社会的排除
 - 1 賃労働／シャドウ・ワーク
 - 2 インダストリーの精神と規律・訓練
 - 3 社会的包摂／排除のポリティクス
- III ニートの実践
 - 1 NEET 株式会社の概要
 - 2 レンタルニート事業
 - 3 「ニー株」という思想
- IV 抽象的労働に亀裂をいれる
 - 1 ニートの〈洞察〉
 - 2 為すこと～自由と必然の二元論を超えて
- V おわりに

I はじめに

マルクスは、「労働は、すべての社会形態から独立した人間の存立条件であって、人間と自然との間の物質代謝を、したがって、人間の生活を媒介するための永久的自然必然性である」〔マルクス 1969：81〕と述べている。たしかに、歴史上存在したあらゆる社会形態において、「人間と自然との間の物

質代謝」としての労働は生命の再生産のための「必然」であった。その意味で、働くことは生きていくためだという言説はまったく根拠のないものというわけではない。そして、生きていくための労働は、資本制生産様式のもとでは賃労働という疎外された形態をとることはいまさら指摘するまでもない。

本稿では、この「必然」ゆえに逃れられない疎外された労働を恢復するような実践として、ニート⁽¹⁾の人たちによる活動を取り上げる。彼らの実践について分析するにあたり、以下、まずⅡにおいて、近代的労働倫理が一方では規律・訓練された「正常」な労働者を創出するが、他方ではニートのような働かない人々の存在を「異常」視し排除することを確認する。そしてⅢでは、ニートたちが立ち上げた「NEET 株式会社」という組織の実践について記述する。Ⅳでは、その記述をもとに理論的考察を行う。そこからは、資本主義的労働（＝抽象的労働）に抗するニートたちの主体性が見えてくるであろう。

Ⅱ 労働倫理と社会的排除

1 賃労働／シャドウ・ワーク

資本主義社会においては、本来商品ではない労働が擬制（fiction）により商品化される [ポラニー 2009]。また、イリイチによれば労働力の商品化による賃労働制の発展とともにシャドウ・ワーク⁽²⁾が成立したという [イリイチ 1982]。つまり、資本主義社会における労働は、擬制商品化された支払われる賃労働と、支払われることのないシャドウ・ワークに二極分化されているといえる。

ところで、ハンナ・アレントは、賃労働とシャドウ・ワーク以外の諸活動力が、生命の再生産には無用な「遊び」や「趣味」というカテゴリーに押し込められることを指摘している。

しばしば私たちは消費者社会に生きているといわれている。そして

(中略)、労働と消費は、生命の必要によって人間に押しつけられた同一過程の二つの局面にすぎない以上、このことは、私たちは労働者の社会に生きているということのいいかえにすぎない。(中略) 私たちがなにをしようと、それはすべて「生計を立てる」ためにしていると考えられている。それが社会の判断である。(中略) 真面目な活動力をすべて生計維持の地点にまで均質化しようとする同じ傾向は、労働をほぼ一致して遊びの反対概念として定義づけている今日の労働理論にも明らかである。その結果、すべての真面目な活動力は、それが生み出す成果にかかわりなく、労働と呼ばれ、必ずしも個人の生命や社会の生命過程のためではない活動力は、すべて遊びという言葉のもとに一括されている。(中略)「生計を立てる」という観点から見ると、労働と関連のないすべての活動力は「趣味」となる。[アレント 1994: 188-190]

ここでアレントが述べている「遊び」や「趣味」とは、「個人の生命や社会の生命過程」に不必要な活動力のことを指しているが、それは生産／消費の論理の外部にある、いわばカネにならない活動力である。それとは反対に、消費することを強いられた「遊び」や「趣味」は、生命の再生産、ひいては資本主義社会の再生産にかかわるシャドウ・ワークである⁽³⁾。資本主義社会においては、カネになる「遊び」や「趣味」はシャドウ・ワークとして存在意義を認められるが、それ以外のカネにならない「遊び」や「趣味」は無益なものとして排除されることになる。

2 インダストリーの精神と規律・訓練

哲学者の鷺田清一は、労働や、シャドウ・ワークとしての「余暇」に効率と生産性の論理が浸透していることについて、次のように述べている。

〈インダストリー〉(勤勉・勤労)という名の、あの近代生活を蔽う「真空恐怖」はこうして、空き時間をもまたすきまなく活用し、開発するようわたしたちを駆りたててくる。インダストリーの精神は〈生産性〉と

いう鏡にじぶんを映す。余暇（自由時間）そのものが消費の制度のなかに組み込まれ、たえず新たな欲望で埋められるだけでなく、さらには何か実のあること、たとえば自己学習や家庭奉仕、ボランティアなどといった別の意味で価値生産的な活動で充填しなければ……という強迫的な意識がわたしたちのなかで芽生えてくる。（中略）こうして、たえず何かをしていないと不安になるというビョーキが生産される。何ごとも、仕事も遊びも、手を抜くことなく全力投球してこそよろこびはあるという、そういうきまじめなメンタリティが形成されてくるのだ。[鷲田 2011：55-56、傍点原文]

このようなインダストリーの精神は、いわゆる規律・訓練（discipline）[フーコー 1977] によって形成されたものであることはいうまでもない。そして規律・訓練と、それにとまなう近代的労働倫理は、以下にバウマンが指摘するように、人々を「正常」と「異常」のふたつのカテゴリーに振り分ける。

「産業社会」の下での生活の始まりは、産業労働者に転じた人々の数が増大し続け、産業社会の究極の姿が一種の巨大工場であり、その下ですべての健全男性が生産労働に携わることになるという確信と密接な関連があった。（中略）この規範に照らすと、労働していない状態は、非雇用（unemployment = 失業）であると同時に、非正常（abnormal = 異常）な状態であって、この規範への違反とみなされた。[バウマン 2008：35、傍点原文]

雇われて働くことが「正常」とされる賃労働制の社会においては、雇用されていないということはすなわち「異常」な状態であるとされる。したがって、本稿で以下に論じていくニートたちは、賃労働／シャドウ・ワークから排除された、生産や再生産、消費を十分に行うことのできない「異常」な人々ということになる。

3 社会的包摂／排除のポリティクス

さて、新自由主義（ネオリベリズム）は、周知のとおりフレキシビリティ（flexibility）を称揚し、雇用のあり方を「液化化」[バウマン 2001] させる。そのような社会にあっては、働かない「異常」な人々を規律・訓練する必要は、資本や国家の側からすれば、もはやない。なぜなら、規律・訓練はコストのかかるものであり、それはいまや個人の自己責任においてなされるべきものだからである。ポストフォーディズム社会では、近代的労働倫理は、働いていない人々を規律・訓練することなく、むしろ彼らを不道徳であると非難して労働市場から排除することを正当化するために機能するのである [バウマン 2008: 150]。

とはいえ、ニートのような「不道徳」で「異常」な人々が社会に一定数存在するとなれば、それは是正すべき「社会問題」として扱われる。それゆえに、彼らをいかに「正常」になるように規律・訓練し、そして社会に包摂するかということがアカデミズムの中でも議論されることとなった。

ニートに関する研究は、教育社会学・労働経済学・家族社会学等の分野においてなされてきたが、それらの研究動向の概観は太郎丸博・亀山俊朗 [2006] が詳しい。太郎丸・亀山によると、ニート論を主導してきた教育社会学では、学校の平等化機能が働かなくなっており、階層や地域、家族について不利な背景をもつ生徒が学校、そして社会から排除されていることが指摘されている [太郎丸・亀山 2006: 7-9]。だからこそ、そのような不利をなくし、労働市場から排除されるニートをなくそうという議論が生まれてくる。

その代表的論者のひとりが教育社会学者の本田由紀である。本田は、いわゆる「ニート」を「非求職型」（働きたいニート）と「非希望型」（働きたくないニート）のふたつに分類している。そして、若者がニートになる要因は、一部の「非希望型」を除いて、ニート自身の働く意欲の問題に還元できるものではなく、労働市場の構造が大きく作用しているのであるから、彼らに対して厳しい労働市場を生き抜くための「職業的意義」の高い教育を施さなければならない、と主張している [本田 2006]。

たしかに、この提言は社会政策としては適切であるといえる。ただし、それは近代的労働倫理をアプリオリなものとして受け入れる限りにおいてであろう。本田の主張では、賃労働に従事することが「正常」な状態であり、そうしないことは（働かなくても生きていける境遇の人たちを除いて）「異常」な状態である、という二元論が前提となってしまう。このような思考から生まれてくるニート対策というものが、彼らに職業訓練（＝規律・訓練）を施し何とかして賃労働制社会に包摂しようというようなものになるのは当然である。

しかし、社会的包摂は同時に社会的排除をともなうものである。たとえば北川由紀彦は、自立支援センターに仕事を紹介してもらったホームレスが、職場の上司に叱責され仕事が嫌になり、結局すぐに仕事をやめ路上に戻ってしまうケースが複数見られるということを報告している〔北川 2014：191〕。センターとしては、ホームレスをはやく「自立」させることを重視するあまり、いったん安定した職に就くと、なるべく離職しないように指導するという。「それゆえ、職場での叱責のような『よくある』ことを理由とした離職は、たんなる『我慢不足』と受け取られる」〔北川 2014：191〕。したがって、センター職員に相談して別の仕事を紹介してもらおうにも言い出しにくく、そのまま路上へと戻ってしまうのである。このホームレスの事例の場合、ホームレスの「我慢不足」に問題があるのであって、彼らは自己責任で社会から排除されているにすぎないのだろうか。それとも「我慢強さ」を十分に教え込めなかったセンター側が、ホームレスの社会的包摂への努力を怠っているのであろうか。

いずれにせよ、このように「『排除』と『包摂』は二項対立的というよりも錯綜しており、何が排除で何が包摂なのかが自明ではない状況」〔内藤 2014：3〕であるといえる。上述のホームレスの例を鑑みれば、そもそも労働に親和的ではない一部の「非希望型」ニートたちに無理やり規律・訓練を施し包摂を試みたところで、彼らがもし従順な労働者になれなかった場合は、「人間の屑」としてのスティグマ〔ゴッフマン 2012〕を刻印され排除されてしまうだけだろう。

ここで問い直すべきは、全体社会から排除されることは「悪」であり、全体社会へと包摂することが「善」である、という固定観念である。マルクス主義哲学者ジョン・ホロウェイは以下のように述べている。

排除された人々が包摂されたくない、自分たちの道を行くと宣言するとき、主流からの排除の反転が起こっている。排除が拒絶になり、排除に処していくために構築されたオルタナティブな社会的諸関係のパターンが、真の亀裂に、「拒絶および創造」の強力な空間になる。[ホロウェイ 2011：42]

働いていない「異常」とされる人々のとるべき選択肢は、社会から排除されるか、それとも規律・訓練によって「正常」に社会へと包摂されるかの二者択一しかないわけではない。「拒絶および創造」という第三の道があるのではないか。

次章において記述されるのは、賃労働制とは違う「自分たちの道を行くと宣言」したニートたちが設立した「NEET 株式会社」についてである。排除を全体社会への亀裂に変え、オルタナティブな空間を形成していくニートたちの実践を見ていこう。

Ⅲ ニートの実践

1 NEET 株式会社の概要

NEET 株式会社（以下、ニー株）とは、その名のとおりニートによって運営される会社である。2013 年 4 月 1 日、企画者である若新雄純^{わかしんゆうじゅん}氏によって、ニー株設立のプロジェクトがウェブサイト上で告知され、メンバーの募集が始まった。その後、説明会や幾度かのミーティングを経て、2013 年 11 月 21 日、正式に会社が発足することとなった。

さて、ニー株がどのような組織であるのかということについては、まず彼ら自身による説明を参照したい。

NEET とは Not in education, employment, or training の略なので、雇われたらニートではなくなってしまう。よって NEET 株式会社には、雇用された従業員は一人もいません。メンバー全員が取締役で、基本給はなく（成果に応じた役員報酬はあります）、労働基準法も適応されません。ニートはニートらしく、取締役として生きていくのです。
[NEET 株式会社 2015 年 10 月 10 日閲覧]

ニートはその定義上、賃労働には従事していないことになっている。したがって、ニー株にはひとりも従業員はいない。いるのは取締役だけであり、その全員がニートという建前なのである⁽⁴⁾。そして、取締役相互の関係は基本的に平等である。

会社の株は、取締役全員が均等に持っています。つまり、全員平等で、うるさい上司も利益だけ搾取する第三者もいません。それでうまくいくかは、未知数です。[NEET 株式会社 2015 年 10 月 10 日閲覧]

全員が平等に株を所有することによって、搾取することもされることもなく、皆が対等の立場で会社の経営に携われるようになっている。このように、資本・賃労働関係を廃棄し、全員による会社の共同所有・共同統治を実現しているところに、通常の株式会社とは違ったニー株の特色がある。

以下、ニー株の基本的な概要をいくつかの項目に分けて確認しておこう。

(1) 役職

取締役の人数は 2015 年 8 月 24 日時点で 139 名（従業員は 0 名）であり、通常の会社ではありえないような取締役の人数となっている。代表取締役は当初、ニー株の企画者である若新氏が単独で務めていたが、その後 2 名が追加され、現在では 3 名となっている（そのうちの 1 名が、後述する仲陽介さんである）。

(2) 所在地・資本金

ニー株の本店所在地は登記上、都内某所ということになっているが、ほかの会社に名義を借りているだけで、そこにニー株のオフィスは存在していない。そのため、何らかの会議等を開催する場合は、レンタルで場所を確保している。

資本金は 105 万円であるが、これは設立時に取締役ひとりあたり 6000 円を徴収したものであり、会社の外部からは一切の投資を受けていない。資本金は基本的に税金や会議室借用などの経費以外には使用していない。事業で資金が必要になった場合、会社の資本金は一切使わず、事業に参加するメンバーが自分たちで資金を集めてくることとなっている。

(3) メンバーの年齢・性別構成、社内の人間関係

取締役の人数が多く、また全員が一堂に会する機会がないため、内部の人間でさえ全体を正確に把握している者はほばいないのであるが、設立時の段階の調査では、平均年齢 27.9 歳で男女比は 8 : 2 であったという。

だが、ニー株のメンバーたちは、年齢や性別など各メンバーの個人情報を把握することにあまり意義を感じていない。たとえば、ニー株では、以下に示すとおり基本的に本名を名乗らないこととなっている（一部、本名を名乗っている人もいる）。

どうせなら新しい人格で、生まれ変わったような気にでもなって、自由に仕事がしたい。NEET 株式会社では、お互いの本名を法務担当以外には知らせず、ハンドルネームで呼び合っています。ちょっとカッコいいのからだいぶヘンなのまで、いろいろいます。[NEET 株式会社 2015 年 10 月 10 日閲覧]

ニー株内においては、各々が日常生活とは別の人格を演じている（とは一概にはいえないが、少なくともそうすることは可能である）。そういうこともあってか、ニー株では互いが互いのプライベートについてよく知らないとい

いう事態が生じている。もちろん、仲の良いメンバー同士であれば、互いの本名やプライベートについて知っていることもある。しかし、基本的に彼らは互いにどこで何をしている人物であるのかを知らず、また興味もないというのが普通である。したがって、ニー株はメンバー全体の情報を管理し把握するといったことにはなじまない組織である⁽⁵⁾。

(4) 事業内容

ニー株は通常の企業とは違い、特定の事業のみを目的とはしていない。

NEET 株式会社の登記上の事業目的は、「一切の事業」となっています。すぐに儲かるかどうか分からない事業やサービスも、楽しければ飽きるまでやります。どうせ、もともとの「バリュー」なんてゼロかマイナスですから。てか、楽しいし！ [NEET 株式会社 2015 年 10 月 10 日 閲覧]

儲かるかどうかにかかわらず、楽しければいい、いわば「なんでもあり」というのがニー株の基本的なスタンスであるということがわかる。ニー株の内部には複数の事業部があるが、その中から具体例としていくつかを表 1 に挙げておく。

表 1 ニー株の事業部

レンタルニート事業部	ニートが客と 1 時間あたり 1000 円で遊ぶサービス。
ニートドリンク事業部	エナジードリンクとは反対の元気が出なくなるようなドリンクの開発。
web コンテンツ配信事業部	ニー株の宣伝等のための web コンテンツ配信。
デジタルゲーム事業部	金銭搾取が第一目的となっている昨今のゲームとは違った魅力的なゲームの開発。

需要があるような、ないような、いまいちよくわからない事業——あくまで筆者の主観にすぎないが——であるとはいえ、とにかく「楽しい」ことを第一義として、さまざまな事業にチャレンジしている。

2 レンタルニート事業

表1に掲げたいいくつかの事業のうち、本節ではニー株の労働観をよく表している事例としてレンタルニート事業（ニートが客と1時間あたり1000円で遊ぶサービス）に着目したい。まずはレンタルニートという事業がいかにして始まり、軌道に乗っていったかの経緯を確認しておく。

レンタルニートは、仲陽介さん（1988年生、男性）という人物によって始められた。仲さんは某大学工学部の学生であったが、2年間の留年を経て卒業した。同期の人たちより長い学生生活を送った仲さんであったが、在学中に就職活動はほとんどしなかった。仲さんは先に卒業し就職していった友人たちから「休みが取れない」、「明日の出勤が憂鬱だ」という話を聞かされるのがよくあったという。そうした中でいざ就活を始めてみたが、面接対策のマナー講座などを受講する周りの必死な就活生たちの姿を目の当たりにして、就活のあり方に疑問を感じるようになった。

仲さんは西日本新聞の取材に対して次のように答えている。

志望動機や自己PRなど、自分を殺し、企業の求める人材であるかのように見せかけなければ採用してもらえない。何のためにそこまでするのか分からなくて〔西日本新聞 2015〕

個性を押し殺してまで「企業の求める人材」を演じることに違和感を覚えた仲さんは、就職して定年まで会社員として働き続ける自分の姿がまったくイメージできなくなったという。結局、彼は一社の面接も受けることなく卒業を迎えることとなった。ちょうどその頃、ニー株の設立の話を聞いた仲さんは、「新しい面白いことができそう」〔西日本新聞 2015〕と思い立ち、そのままニー株に参加することを決めた。

仲さんは、ニー株が設立されて以来の数か月は、自ら主体的に何かの事業を始めようとはしなかった。そろそろ何か積極的に事業を提案したい、ということを考え始めていた折に、彼は「遊びながら仕事案を考えよう」というコンセプトのもと、高尾山遠足のイベントを企画した。レンタルニートはこ

の遠足の最中、高尾山頂で行われた小会議の中で生まれてきたアイデアである。「ニートがそのあり余る時間を利用して客と遊ぶサービス」を事業案として提案したところ、だれかが「レンタルニート」という名前をつけたのが始まりだった。

そもそもなぜこのような事業案を思いついたかといえば、何か大きな事業をやるには活動資金が不足していたからである。仲さんは大学を卒業した時点で、貯金などがあったわけでもなく、金銭的な余裕がなかった。したがって、事業を起こそうと思っても先立つ資金を数万円すらも用意できないという状況であった。そのため、とにかく元手の必要ない仕事を始めようと考えた結果生まれてきた発想がレンタルニートだった。

「レンタルニート」というネーミングを気に入った仲さんは、さっそく単独で行動に移した。人と合わせて行動するのが苦手だという仲さんは、社内で人員を集めて事業部を立てるという通常の方法はとらなかった。なぜなら、まず独断で実行に移し、それからメンバーを募るというスタイルの方が、気が楽であったからである。

2014年5月26日、仲さんは段ボールに「レンタルニート」と書かれた紙を貼っただけの看板をもち、秋葉原の路上に立った。この日は仕事の依頼はなかったものの、通りすがりの人たちに声をかけられたり写真撮影を求められたりと、まずまずの反応であった。また、偶然通りがかったニュースサイトの人に取材を受けて、その日のうちに記事を Web 上に掲載してもらうということも起きた。レンタルニートの宣伝効果が意外にも大きいことに気付いた仲さんは翌週にも再び秋葉原に立ち、さらに Twitter でも宣伝ツイートを行った。その反響は非常に大きく、ツイートを見てくれた人から差し入れをもらい、さらに初めての客も付いた。そして、レンタルニートを始めてからちょうど2週間経った6月9日には、ローカル局からの突然のオファーでテレビ番組への出演も果たした。このように、マスコミの関心も引き付け、徐々に世間での知名度を上げることに成功したのであった。

以上のような経緯を経て始まったレンタルニートであるが、では仲さんは具体的にどのような「思い」にもとづいてレンタルニートの活動をしている

のだろうか。その点を次に見ていこう。

仲さんは「さとり世代」について、ブログで次のように述べている。

世の中が合理化されシステム化やマニュアル化が進んだことによってこれらの恩恵（質の高い商品やサービスを消費者が安く手軽に入手可能であるということ——引用者）が受けられるわけですが、今の時代はそのシステムやマニュアルが働く人に負担をかけている部分が大きいと思います。

サービス内容が濃くなった分従業員が覚えなきゃいけない内容が多かったり。

基準が上がりすぎて丁寧な振る舞いや丁寧なもののづくりを強いられたり。

それでいて賃金が良くなるわけではないし残業も多いし休みも取りづらい。

そんな理由から若者たちはプライベートに金や体力を使っている余裕が無いんじゃないでしょうか。

それに合わせ、金や体力を使わずに楽しむ方法が増えてきている。

誰もがみんな必至に苦勞して働かなければ食べるものにさえ困って生きていけなくなる、なんてのは戦争が終わった直後の時代の話であって、今みんなにそれを求めるのは時代に合っていないと思う。[仲 2015a]

不況の時代、高い賃金をもらえるわけでもないのに、何のために好き好んで「システム化」され「マニュアル化」された労働なんてしなければならいいのか、と「さとり世代」の仲さんは、現代社会のあり方に疑問を抱いている。

仲さんは筆者に対して、「レンタルニートは元手ゼロのニートでも始められる。雇われない生き方があたりまえになれば、ニートでも生きていける」と話していた。無駄な浪費をしない「さとり世代」といっても、生活をする

のには最低限のお金が必要であり、そのお金を稼ぐには働かなければならない。しかし、「システム化」され「マニュアル化」された労働はしたくない。とはいえ、元手がなければ、どこかに雇われる以外に稼ぐ手立てはない。そこで考え出されたのがレンタルニートなのである。

レンタルニートのサービス内容は、あくまで客と「遊ぶ」ということであって、「労働」と感じられるものは基本的には受け付けていない。これまで受け付けてきたレンタルニートの仕事は、食事をしながら会話したり、ゲーム等で一緒に遊ぶといったものが主で、客が予約をした際に事前に何をするか決めておく場合もあれば、とりあえず会ってから何をしたいか考える場合もある。

仲さんのレンタルニートとしての収入は月に1～2万円程度だという。それでも仲さんは、次のように述べている。

自分としてはレンタルニートは「遊びだけ受け付ける」というテーマに沿ってるので趣味のように続けていけるものとして考えていたいなあ。

と言いつつもレンタルニートは稼げる事業ではありません。収入を考えると僕自身のメインとなる活動は今後もっと別の仕事となっていく予定でいます。[仲 2015b]

レンタルニートは、たいした需要もないし、稼ぐこともできない。それでも、仲さんは「趣味」としてレンタルニートを続けたいという。

とはいえ、レンタルニートの仕事が「遊び」と感じられるかどうかは、その依頼内容にもよる。その点については、以下に示す家具組み立て依頼のエピソードが参考になる。

twitterの相互フォロー仲間から家具組み立ての手伝いをして欲しいとの依頼が来ました。酒飲んだりしながらのんびりやろうという感じで。

確かお互いフォローし合ったのはレンタルニートを始めるよりちょい前の話ですが

つい最近都内に引っ越して来たとのことで、家具の用意など荷物整理をしていたところだそう。

ちなみにレンタルニートではただの家具組み立てや、家事代行サービスの様なものはできませんが

今回の依頼では「酒を飲んでお喋りしながらやる」というような部分が大事だったりします。

あくまで「一緒に遊ぶサービス」。

結局ただの「便利屋」じゃねーか、って言われることがよくありますが違うんです。1時間1000円で労働力を雇えるサービスではないんです。

逆に言うと趣味や遊びの内容が含まれればだいたいOKなので

自宅に来て一緒にゲームで遊んでくださいとか、遊べる人いないので一緒にお出かけしてくださいとか、そういったものをぜひお願いします。[仲 2014]

ただ単に「家具組み立ての手伝いをして欲しい」という依頼であれば、それは仲さんにとって「便利屋」のすべきことにすぎず、「趣味や遊び」の要素は感じにくい。彼が依頼を受け付けるかどうかの基準は、「趣味や遊び」の要素が入っているかどうかにかかっている。上述の事例でいえば、サービス提供者と依頼者が一緒に「酒を飲んでお喋りしながら」家具の組み立てをするということで生じる「遊び」の側面が重要なのである。

3 「ニー株」という思想

本節では、ニー株の企画者であり代表取締役会長でもある若新雄純氏が、ニー株という組織によって何を目標しているのか、その理念を明らかにすることで、ニー株の本質に迫っていく。

若新氏は産業・組織心理学やコミュニケーション論の研究者・教員として

大学に所属するかたわら、コンサルタントやプロデューサーとしてさまざまな企業・団体・自治体などと実験的なプロジェクトを企画している。若新氏は、「世の中からズレていること自体が『悪』だということではないし、少数派だからといって必ずしも劣っているわけではありません。（中略）そんなマニアックな少数派が日本全国から集まる機会をつくれば、成功や失敗を超えた『新しい何か』が生まれるかもしれないと思い」ニー株の企画を立ち上げたと述べている〔若新 2015：122〕。彼にとってニー株は、新しい社会コミュニケーションを模索するための実験のひとつだといえる。

若新氏は、ニー株に対するよくある誤解について次のように述べている。

よく勘違いされるのですが、これは、僕がニートたちに対して手を差し伸べたり、何かを施したりする「援助」のプロジェクトではありません。ニートと呼ばれる少数派の若者たち自身に「新しい何か」を考え、つくってもらう。そのスタンスは一貫してはっきりとさせておかなければいけませんでした。〔若新 2015：119〕

若新氏は筆者に対しても、「ニー株のメンバーたちが食えるようになるかどうかはどうでもいいし、たぶんいまのままではそれは不可能。それよりも、ニートたちの新しい空間をつくるのが重要だ」と語っていた。ニー株は、ニートに労働倫理を教え込み彼らを自立させるための組織ではないのである。

若新氏が以上のようなことを考えるにいたった背景には、彼の心理学の研究がある。若新氏は、マズローの「自己実現（self-actualization）」という概念に着目している。「自己実現」とは「社会や環境に『適応』すること」でもなければ「目標を達成したり、ゴールに到達したりすること」でもなく、「人間本来の自然で多様な姿、『ありのままの状態』を体現し続けること」だという〔若新 2015：49-50〕。つまり、「自己実現とは、単に自己中心的になることではなく、自分の欲やエゴを認めつつ、他者の存在やさまざまな環境、想定外の出来事や変化などを受け入れ、それらとの関わり合いや複雑な日常の

体験を通じて、自分の可能性や潜在能力を発揮していこうとすること。つまり、結果の状態ではなく、成長の『過程そのもの』なのである〔若新 2015：50〕。

では、若新氏やマズローのいう意味での真の「自己実現」がなされる場をつくるために、ニー株ではどのような試みが行われているのだろうか。若新氏は以下のように述べる。

「ゆるすぎる」会社を実現していくために、NEET 株式会社では「ふつう」の会社組織ではあたりまえのルールやヒエラルキーを、とにかくいったんリセットしていきしました。僕は別にルールやヒエラルキーが不要だと考えているわけではありません。場所やコミュニティに合った、適切なルールや仕組みを新しくつくりなおしていくことが大事だと思っているにすぎません。〔若新 2015：131、傍点は引用者〕

とはいうものの、ルールや仕組みがない状態では、何かが起きる度にメンバー同士がコミュニケーションをとり合わざるをえなくなります。それでうまくまとまればいいのですが、ただでさえまとまりのないバラバラな若者が100人以上も集まっているのです。まさにぐちゃぐちゃの無秩序状態、「カオス」です。〔若新 2015：131〕

ルールやヒエラルキーがなければ当然、ケンカや衝突を繰り返す「カオス」を生む。だが、注意してほしいのは、既存のヒエラルキーをいったんリセットすることが重要なのだということである。

この点については、ニー株が2014年6月27日に行った臨時株主総会のエピソードが参考になる。この総会には、現地の会場に約50人が集まり、その他のメンバーの一部もオンラインで参加している。所要時間は9時間にも及んだが、そのうち3時間にもわたって議論されたのが、代議制を導入するかどうかという議題であったという。全員が平等に株をもつニー株では、全員に平等に発言権がある。したがって、企業統治のやり方は、全員参加による

直接民主制という方法以外にない。しかし、直接民主制では意思決定がスムーズに行えず、このままではよくないのではないか、という意見もあがるようになってきた。そこで若新氏は、間接民主制的な代議機関を設置するのはどうかという提案をした。その結果、長時間にわたる議論を経て、6人のメンバーによる試験的な執行部を設けることとなった（ちなみに、この執行部は現在では機能していない）。

若新氏は、なぜ最初から代議制を設置せず、あえて意見のまとまりにくい直接民主制から始めたのかということについて、次のように述べる。

僕は、この「原始的プロセス」が必要なのだと思っています。遠回りの議論や心をすり減らすような対話を続けているからこそ、メンバー同士の理解が生まれ、役割分担もちょっとずつできるようになっていくのだと思います。[若新 2015：136-137]

大事なのは、その結果（間接民主制——引用者）にたどり着くまでの「試行錯誤」の段階になにがあったのかということです。当然、妥協したり、淘汰されたり、失われた事もたくさんあったわけです。その過程をなにも知らずに、あるいは体験せずに、間接的な権利やシステムだけを与えられても、「民主主義制度の構成者」になどなれるわけがありません。当事者として物事に主体的に関わるというのは、それくらい難しいことであり、尊いことでもあると思うのです。[若新 2015：137-138]

他人事ではなく「私たち」のこととして、全員が主体的に議論に参加するという「原始的プロセス」を経ることで、「合理性や妥当性以上に、十分な情報共有、意見や感情の発散、そしてなによりも『納得感』」[若新 2015：133-134] をともなった秩序を創り出すことができるということである。

Ⅳ 抽象的労働に亀裂をいれる

1 ニートの〈洞察〉

本章の目的は、ニー株の実践がいかなる意味で資本主義的労働に抗するものとなっているのかを、前章における記述をもとに分析することにある。本節ではまず、冷静に資本主義の原理を見とおすニートのありように焦点をあてることとする。

ポール・ウィリスは『ハマータウンの野郎ども』[ウィリス 1996]の中で、〈洞察〉という概念を用いている。

〈洞察〉とは、ある文化を共有する成員たちが自分たちを囲繞する全体社会とのかかわりで自分たちの生存の位相や条件を見ぬこうとすると、その文化の内部で働く衝動的な力を指している。[ウィリス 1996 : 288]

ウィリスが描き出したのは、イギリスの労働者階級の不良少年たちである〈野郎ども〉が、資本主義の上部構造としての学校教育の欺瞞性を鋭く〈洞察〉し、反学校の文化を形成していくさまであった。以上のような〈洞察〉という視点は、ニー株に対しても当てはめることができる。

仲さんは、自分がその企業に入って何がしたいのかという明確な志望動機をもつことや、自分はその企業にとってどのような価値があるのかをPRすることに意義を見出せず、疑問を感じていた。「システム化」や「マニュアル化」された労働——マクドナルド化[リッツア 1999]された労働——に従事するということは、自己を労働力商品として疎外するものであることを仲さんはよく理解しているからこそ、志望動機や自己PRの欺瞞性に敏感なのである。だからこそ、彼は遊びながら稼ぐレンタルニート事業を始めたのであった。そのレンタルニートにおいても、原則として「遊び」しか受け付けず、便利屋のようなアルバイトの依頼は断っているのである。

また、仲さんは、「なぜ普通に就職して働こうとはしないのか」という筆者の問いに対して、「就職したからといって安泰という世の中じゃないじゃないですか」と答えたことがあった。ネオリベラリズムにおいては、一方で企業内には優秀な人材を囲い込み、他方では失業と非正規労働との間を揺れ動く余剰人員を創出する。たとえ労働力商品になることを甘んじて受け入れ就職したとしても、いつ倒産したりリストラされたりして余剰人員となってしまうかわからない。仲さんはこのことを十分に理解した上で、「だったら、最初から就職なんかしない」と、ニートのままでいることに対する彼なりの理由付けをしている。

これらのことから、仲さんは、労働力の擬制商品化という資本主義の本質や、ネオリベラリズムにおける労働力のフレキシブル化というような、「自分たちを囲繞する全体社会」の構造や仕組みを直感的に〈洞察〉しているのだといえよう。

ウィリスは「社会を構成する人間的主体は、支配イデオロギーの受動的な担い手にとどまりえないのであり、既存の社会構造を再生産するにしても、闘争や抵抗や部分的な洞察を行なう、イデオロギーにたいする能動的な改竄者としてそうする」[ウィリス 1996: 409] のであって、「そこから現存の体制に適合しない諸結果を導き出す真に破壊的なロジックが生まれてこないともかぎらない」[ウィリス 1996: 411] と述べている。では、ニ一株なりの資本制システムの「改竄」の「ロジック」とはいったい何なのか、次節でそれを検討しよう。

2 為すこと～自由と必然の二元論を超えて

アレントは人間の基本的な活動力 (activities) を労働 (labor)、仕事 (work)、活動 (action) の3つに分類している。労働とは、「人間の肉体の生物学的過程に対応する活動力である」[アレント 1994: 19]。仕事とは、「人間存在の非自然性に対応する活動力」であり、「個々の生命を超えて永続する」ような「自然環境と際立って異なる物の『人工的』世界を作り出す」[アレント 1994: 19-20]。活動とは、「物あるいは事柄の介入なしに直接人と人

との間で行われる唯一の活動力であり、多数性という人間の条件、すなわち、地球上に生き世界に住むのが一人の人間 man ではなく、多数の人間 men であるという事実に対応している」[アレント 1994:20]。要するに、アレントは労働を、生命の再生産のための「必然」に縛られた、私的領域における活動力と捉え、それとは反対に、活動を、人と人とが人格的な関係を取り結ぶことのできる「自由」の空間、公的領域における活動力と捉えている⁽⁶⁾。

さて、マルクスは『資本論』第1巻第1章第2節において、資本主義的労働は、商品の使用価値を生む「有用労働」と交換価値を生む「抽象的労働」という二重の性格をもつことを指摘している [マルクス 1969:78-88]。だが、この「有用労働」という概念には問題がある。「有用」な労働とそうでない労働との区別は、資本主義社会にとって「有用」であるかどうかが判断基準となるからである。したがって、ホロウェイが指摘するように、「マルクスがいう労働の二面的性質については、抽象的労働と具体的な為すことのあいだの対照性から構成されると考えるほうが良い」[ホロウェイ 2011:129、傍点原文]。

資本主義社会においては、労働は賃労働として擬制商品化される。したがって、アレントの労働／活動の区別は、資本主義社会ではホロウェイのいう抽象的労働／為すことの二重性として現れる。

表2 アレントとホロウェイの概念比較

	必 然	自 由
ア レ ント	労 働	活 動
ホ ロ ウ ェ イ	抽 象 的 労 働	為 す こ と

そして、この抽象的労働／為すことの両者は、個々の労働の中に敵対しつつ内在している。たとえば、労働力を生産する教師でありながらも、生徒には社会について批判的に思考するよう教育することもできるし、自動車工場の組み立てラインで働きながらも、自由になれるつかの間には、指だけでギターのコードの練習をすることもできるし、また、ミシンでジーンズをつく

りながらも、心は別のところにあり、自分と子供のための新しい部屋をつくることを考えることもできる [ホロウェイ 2011 : 130]。

では、抽象的労働／為すこと、必然／自由の敵対的な二項対立は、どのようにすれば乗り越えられるだろうか。今村仁司は「遊戯性」がそれを可能にすると述べる。

自然必然性の領域の労働が、文脈を変えるだけで、いわば自動的に自由な活動になることはありえない。奴隷的労働と自由な活動はあくまで対立する。労働は他の何ものかと結合されなければ、自由な活動への転換はありえない。この性質転換のための蝶番となるのが遊戯性である。
[今村 1988 : 213、傍点原文]

遊戯性＝〈遊び〉とは、インダストリーの精神がもたらした隙間のない自己同一性に抗するものであり、違う考え方や感じ方をもった他者との交わりの経験をとおして自己がゆるみ、その都度の他者のありように応じて自分自身が変容していくことである [鷺田 2011 : 156-157]。

「遊び」を「賃労働／シャドウ・ワークの領域から排除された、カネにならない行為」という資本主義的規定を取り去って、「ゆるみ」としての〈遊び〉と捉え返すなら、それはまさに若新氏やマズローのいう意味での「自己実現」といいかえて差し支えないものだろう。労働としての事業を、〈遊び〉の要素を蝶番に、他者との対面的な活動＝為すことに変容させ、ニートがりのままで「自己実現」できる場がニ一株なのである。

そうした「自己実現」の好例がレンタルニートである。仲さんはニ一株に雇われて働かされているわけではない。楽しいから自発的にやっているのがあって、だからこそ仲さんはほかに稼げる事業ができて、レンタルニートを「趣味」として続けていきたいと考えている。また、レンタルニートは利用者から1時間1000円で「労働力」を購入されているわけではない。あくまで労働と感じられるものは受け付けず、〈遊び〉のみを受け付ける。労働と〈遊び〉の境目が微妙なもの（家具組み立ての手伝い等）に関してはなるべく

〈遊び〉の論理から離れすぎないように工夫する。もちろん、お金を稼いでいる以上、レンタルニートは生命の再生産のための労働、市場原理にもとづいた抽象的労働であることに変わりはない。だが、そこには〈遊び〉という蝶番があるからこそ、自由な活動＝為すこととして感じられるのである。

先述の臨時株主総会もまた同じである。「楽しければ飽きるまでやります」[NEET 株式会社 2015 年 10 月 10 日閲覧] という〈遊び〉のスタンスの会社だからこそ、会議であっても、会社経営のための抽象的労働という側面を超えることができる。

臨時株主総会は 9 時間、そのうち代議制導入の議論だけでも 3 時間を費やしたが、その「遠回りの議論や心をすり減らすような対話」[若新 2015: 136] というのは、他者との交わりとしての〈遊び〉であると同時に、「自己の時間を管理運営する政治的な自律性」[ネグリ&ハート 2013: 100] をともなった活動＝為すことである。

そもそも、ルソーにとっての代表制とは、「全体意志（＝全員の意志）」から「一般意志（＝全員によって事前には選ばれるが、誰にも応答責任をもたない者たちの意志）」への移行によって生み出されたものである[ネグリ&ハート 2013: 56]。代表制＝一般意志へ抗する運動として、ニー株では直接民主制による決定と、そのための時間の自律的管理がなされている。たとえ間接民主制的な執行部を設けることになったとしても、それがあくまで主体的な議論の参加による「納得感」[若新 2015: 134] をともなったものである限り、選ばれた代表はニー株のメンバーに対して応答責任をもつ。その意味で彼らの実践は全体意志＝活動＝為すことであることに変わりはないのである。

V おわりに

本稿では、まず近代的労働倫理が働かない人々を「異常」なものとして排除することを確認した。そのような社会においては、ニートは「正常」な状態から逸脱した存在であり、賃労働制社会に包摂すべき支援対象となってしまう。

しかし、包摂政策からはこぼれ落ちる人々も少なからず存在しているはずである。そこで本稿ではこうしたマイノリティたちに光をあてるために、ニートたちが立ち上げたニー株という組織の実践を題材として取り上げた。働かないということはすなわち社会からの排除を意味するが、かといって彼らは包摂されたいわけでもない。とはいえ、働かなければ生きていけないのだから、そもそも根底から働き方を変えればよい。ニー株というのは、オルタナティブな働き方の提示であり、運動なのである。

もちろん、それは資本主義そのものに対する全面的な抵抗運動ではない。ニートたち、あるいは「私たち」にできるのは、「いま・ここ」で資本主義に小さな亀裂をいれようという運動だけである。そしてそれは労働を資本から「私たち」のもとへと取り返し、「私たち」の活動＝為すことへと変容させることである。

本稿を媒介として、読者がニートたちの抵抗の技法を学び、自身の労働観をあらためて問い直す機会となるのであれば、ニー株のいれた小さな亀裂はさらに広がってゆき、より大きな裂け目となろう。そういう意味で、本稿自体が「私たち」のための為すことを創出する運動である。

注

- (1) 「ニート (NEET)」とは Not in Education, Employment or Training の略である。つまり、学生でもなく、働いているわけでもなく、職業訓練も受けていない人々のことを指す。厚生労働省では、15～34 歳の非労働力人口のうち、通学、家事を行っていない若年無業者を「ニート」と定義している。しかし、本稿ではそのような定義にはこだわらず、単に「自称・働いていない人」というような曖昧な意味合いで「ニート」の語を用いることとする。なぜなら、上述のような厳密な定義は量的測定において必要とされるものにすぎないからである。だが「ニート」であるかを決めるのは、統計を作成する行政や研究者の側ではなく、あくまで当事者側であるというのが本稿のスタンスである。
- (2) イリイチはシャドウ・ワークの具体例として以下のものを挙げている。「(シャドウ・ワークには——引用者) 女性が家やアパートで行なう大部分の家事、買物に関係する諸活動、家で学生たちがやたらにつめこむ試験勉強、通勤に費やされる骨折りなどが含まれる。押しつけられた消費のストレス、施療医へのうんざりするほど規格化された従属、官僚への盲従、

強制される仕事への準備、通常『ファミリー・ライフ』と呼ばれる多くの活動なども含まれる」[イリイチ 1982:193]。

- (3) たとえば、レジャー施設に遊びに行くことは、直接に生命の再生産にかかわる性質のものではない。しかし、賃労働のための英気を養うという意味では、間接的に生命の再生産に関与しており、また、そこでの消費は資本の拡大再生産にも寄与しているのである。
- (4) ただし、実際には経済的事情からニートをやめ、フリーターや正社員など賃労働に従事し始めた者も存在する。また、そもそも最初にニー株のメンバーを募集した際、「厚生労働省の定義する『ニート』におおむね合致する人」という曖昧な条件を設定した上、履歴書の提出を求めなかったこともあり、ニー株には当初からフリーターなど、ニートではないが「自称ニート」の人たちが存在していた。このことについては、ニー株内でも既成事実となっている。
- (5) 若新氏は、「ニー株の組織全体の状況を把握しようとする」と、ヒエラルキーを生む可能性があるし、そういうことをしようとした人に限ってうまくいってなかった」と話していた。
- (6) ちなみに、仕事は生命の「必然」から脱してはいるが、活動の基盤となる「世界」を制作する職人的な活動力という意味では、完全な「自由」というわけではない。したがって、仕事は「必然」と「自由」の間にある活動力であるといえる。そのため、本節では仕事は考察の対象としない。

参考文献

アレント、ハンナ

1994 『人間の条件』志水速雄訳、ちくま学芸文庫。

今村 仁司

1988 『仕事』弘文堂。

イリイチ、I

1982 『シャドウ・ワーク』玉野井芳郎・栗原彬訳、岩波書店。

ウィリス、ポール

1996 『ハマータウンの野郎ども』熊沢誠・山田潤訳、ちくま学芸文庫。

北川 由紀彦

2014 「ホームレス状態から地域生活への移行において何が問われているのか」『社会的包摂／排除の人類学——開発・難民・福祉』内藤直樹・山北輝裕（編）、pp.183-199、昭和堂。

ゴッフマン、アーヴィング

2012 『スティグマの社会学——烙印を押されたアイデンティティ』石黒毅訳、せりか書房。

太郎丸 博・亀山 俊朗

2006 「問題と議論の枠組み」『フリーターとニートの社会学』太郎丸博（編）、pp. 1-29、世界思想社。

内藤 直樹

2014 「『社会的包摂／排除』現象への人類学的アプローチ」『社会的包摂／排除の人類学——開発・難民・福祉』内藤直樹・山北輝裕（編）、pp. 1-13、昭和堂。

ネグリ、アントニオ&マイケル・ハート

2013 『叛逆——マルチチュードの民主主義宣言』水嶋一憲・清水知子訳、NHK 出版。

パウマン、ジークムント

2001 『リキッド・モダニティ——液状化する社会』森田典正訳、大月書店。

2008 『新しい貧困——労働、消費主義、ニュープア』伊藤茂訳、青土社。

フーコー、ミシェル

1977 『監獄の誕生——監視と処罰』田村俣訳、新潮社。

ボラニー、カール

2009 『[新訳] 大転換』野口建彦・栖原学訳、東洋経済新報社。

ホロウェイ、ジョン

2011 『革命——資本主義に亀裂をいれる』高祖岩三郎・篠原雅武訳、河出書房新社。

本田 由紀

2006 「『現実』——『ニート』論という奇妙な幻影」『「ニート」って言うな！』本田由紀・内藤朝雄・後藤和智著、pp.15-112、光文社新書。

マルクス、カール

1969 『資本論（一）』エンゲルス（編）、向坂逸郎訳、岩波文庫。

リッツァ、ジョージ

1999 『マクドナルド化する社会』正岡寛司監訳、早稲田大学出版部。

若新 雄純

2015 『創造的脱力——かたい社会に変化をつくる、ゆるいコミュニケーション論』光文社新書。

鷺田 清一

2011 『だれのための仕事——労働 vs 余暇を超えて』講談社学術文庫。

新聞

西日本新聞

2015 「やりがい求めて 就活を考える③」4月16日、朝刊。

インターネット

仲 陽介

2014 「10月11日 家具組み立てのレンタルニート」『NEET 株式会社のレンタルニート』<http://>

//ameblo.jp/rental-neet/entry-11938962942.html (2016 年 9 月 11 日閲覧)。

2015a「6 月 18 日 さとり世代? 金が無いなりにやっています」『NEET 株式会社のレンタル
ニート』 <http://ameblo.jp/rental-neet/entry-12041305843.html> (2016 年 9 月 11 日閲覧)。

2015b「7 月 18 日 宅飲み・屋外飲みに対応」『NEET 株式会社のレンタルニート』 <http://ameblo.jp/rental-neet/entry-12058835805.html> (2016 年 9 月 11 日閲覧)。

NEET 株式会社

<http://neet.co.jp> (2015 年 10 月 10 日閲覧)。